



「妙見山陣備の図」生野義挙絵巻

# 生野義挙から150年

## 維新の魁を振り返る

文久3年（1863）10月、日本の歴史に残る事件が生野で起こりました。「生野義挙」（生野の変）と呼ばれる事変です。

およそ270年にわたって続いた徳川幕府の政治に対する不満から改革を求め、欧米諸国の脅威から国を守る攘夷を志す人たちが、但馬各地の農民と一緒に幕府の拠点である生野代官所を占拠して挙兵しました。結果はわずか3日間での破陣となりましたが、この4年後に起こる明治維新の魁（魁）になったと言われています。

今月の広報では、今年で150年を迎える「生野義挙」について、その概要とともに、節目を迎え市内外で行われている取り組みなどについて紹介します。

（※）現在、生野義挙は「生野の変」「生野の乱」の呼称が一般的ですが、幕末期の攘夷・討幕の挙兵に使用された歴史的用語であることから「生野義挙」と呼称しました。

## 幕末の情勢

徳川幕府はながらく鎖国政策をとってきまされたが、当時の欧米諸国から、貿易の相手先として、また、長距離航海の中継点として日本は魅力的でした。嘉永6年(1853)に来航したペリーはアメリカ大統領の親書を携え強圧的に開国を迫りました。そして、嘉永7年(1854)3月3日、幕府はペリーとの間に日米和親条約を結び、次いでイギリスやロシア、オランダなども締結を行い二百年続いた鎖国政策に終止符を打ちました。

幕府のこのような動きは尊皇攘夷派の活動を刺激し、攘夷派に対しての弾圧(安政の大獄)や、さらにその中心人物であった井伊直弼を暗殺する事件(桜田門外の変)が起こります。そうした改革や政争が繰り返されるなか、情勢は長州藩や攘夷派の公卿(国政を担う公家)が主導権を握る攘夷政策へと方向転換していきました。

一方、嘉永7年3月25日、外国船が但馬沖を通過するという事件が起こりました。当時は、欧米からの脅威を排除するために、海岸の防衛が課題となっていました。日本海に面した但馬は、京都に近いことから、また、生野代官所の軍備が手薄であったことから、ことさら大きな問題となっていました。

このような状況に危機感を募らせたのは、養父那能座村(現養父市能座)の北垣晋太郎をはじめ、養父郡高田村(現朝来市和田山町)の中島太郎兵衛、朝来郡竹田町(現朝来市和田山町)の太田六右衛門、朝来郡佐中村(現朝来市佐中)の進藤俊三郎ら但馬の豪農たちでした。彼らは農民を集め兵士として組織し、海岸防衛の備えにしようとしていました。

文久3年(1863)1月、北垣晋太郎は京都に出て幕府と朝廷に農兵組織組立の働きかけを行いました。その結果8月14日に幕府から、16日には朝廷から丹後久美浜・但馬生野両代官所に農兵組立の許可が出ました。

## 大和天誅組の変

文久3年8月17日、孝明天皇による攘夷祈願のための大和行幸計画の露払いとして、幕府の天領であった大和五条の代官所が攘夷派浪士の「天誅組」によって襲撃され、代官が殺害される事件「天誅組の変」が起こりました。

ところが、天誅組が挙兵した直後の8月18日、京都では薩摩・会津藩による政変が起こり、長州藩とともに朝廷内で強硬に攘夷を進めていた過激派公家が京都から一掃されてしまいます。計画されていた天皇の大和行幸も中止となり、天誅組は苦境に立たされることになりました。

幕府からの弾圧を逃れて但馬に潜伏していた、平野國臣(元福岡藩士)・美玉三平(元薩摩藩士)・農兵組立の中心的人物北垣晋太郎たちは、天誅組の救援のため但馬農兵の起用を考えました。

9月5日、養父神社の神宮寺(普賢寺)で、養父・朝来・城崎三郡の有志30人あまりが集まり第一回の農兵組立会議が開かれました。続いて9月19日、二回目の農兵組立会議が高田村の中島太郎兵衛宅で開かれ、天誅組に呼応する形で生野代官所占拠を画策し、その期日を10月10日と決定しました。

代官所を占拠するには、暴動や一揆ではなく総帥として統率をとる人物が必要と、同志の中から、平野



総帥として迎えられた澤宣嘉

國臣・北垣晋太郎の二人が長州に赴き、京都を追われた七卿(攘夷派の7人の公卿)の一人で周防三田尻(現山口県防府市)に滞在していた、澤宣嘉を説得し迎えることになりました。

文久3年10月2日深夜、澤宣嘉をはじめ、奇兵隊第2代総督であった河上弥市(南八郎)と隊士13人などを中心とした一行27人は三田尻を脱し、10月9日、播州飾磨港(現姫路市)に到着します。

ところが情勢は急変します。武器調達のため京都へ赴いていた進藤俊三郎から、天誅組は既に破れ壊滅したとの知らせが入ります。

生野での挙兵計画は意味を失ってしまいました。平野國臣や但馬出身の多田弥太郎(出石藩士)、北垣晋太郎、進藤俊三郎らは中止を促し、澤宣嘉に鳥取方面に逃げることを勧めます。しかし奇兵隊総督を辞し隊士を率いてきた南八郎らは強硬論を主張します。

結局、強硬論に引きずられ10月11日、森垣村(現生野六区)に到着、延応寺に入り、その夜には生野銀山町の大山師であった丹後屋太田次郎左衛門方に移りました。

## 代官所占拠

翌12日午前2時ごろ、志士たちは生野代官所に押しかけ、占拠し本陣としました。しかし、代官所側は拳銃の動きを事前に察知しており、この時にはすでに救援の密使を出石藩・姫路藩の各藩に派遣していました。

代官所に置かれた本陣では但馬の村々に対し、20歳以上40歳までの男子は残らず刀・槍・鉄砲等の武器を持って代官所に集まるよう生野御役所名で指示。12日の昼ごろには2、3千人ほどの農民が集まり、これを村別に組分けし、一番隊から八番隊に編成しました。

一方、出石藩では生野代官所からの救援要請を受け、13日の早朝には一番手として950人、二番手、三番手としてそれぞれ133人の藩兵が生野に向かい出兵しました。

# 破陣

生野の本陣では出石藩からの出兵を知り、これを迎え撃つため南八郎以下18人が山口村の西念寺に出陣し、夕刻には妙見山に布陣しました。

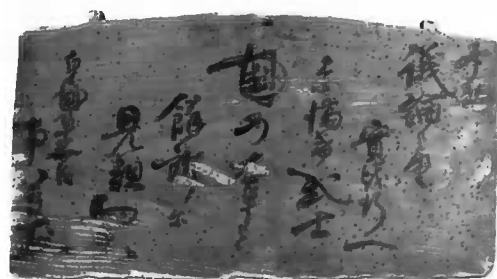
その後、出石藩の出兵に引き続き豊岡藩、姫路藩も出兵したとの知らせが伝わり、再度、解散論、決行論の論議が持ち上がりました。本陣に立てこもり藩兵を迎え撃つか、自刃するか、丹波経由で京都へ向かうか、解散するか。結局は強行論者の南八郎らが不在であったことから、解散が決定されたのです。

この決定を多田弥太郎が妙見山に立てこもっている南八郎に伝え説得しますが、南らは聞き入れませんでした。

多田弥太郎はその旨を澤宣嘉に伝えるとともに脱出を勧めます。澤宣嘉はこの際に解散し再挙を図ることを決意し、13日夜10時ごろ「各部所巡視」と称し、部下数名とともに本陣を脱出しました。

その他の志士たちも、13日夜半から14日早朝にかけて生野を落ち延びました。

生野を脱出した志士の内、澤宣嘉以下十数名は逃げ延びることができましたが、残る多数の志士たちは、途中で討ち死にか、自刃または捕縛された後に獄死



## 奉献

議論より

実を行へ

なまけ武士

国の大事を

余所に

見る馬鹿

皇国草莽臣

南八郎(花押)

南八郎が残した奉献額(山口八幡神社所蔵)

するなど悲惨な最期となりました。

一方、妙見山に布陣していた南八郎ら13人は、14日午後になってから生野本陣に引き上げるため、山を下りましたが、志士たちから離反した農兵たちがしきりに発砲してくるので、「これ以上無益な殺生はすまい」と、妙見山麓の山伏岩で全員自刃しました。

「議論より 実を行へ なまけ武士」

国の大事を 余所に見る馬鹿

妙見堂での南八郎の句です。思うように事が進まないことに対する無念さと、志士たちの混乱ぶりがわかります。

こうして、生野義拳はわずかのうちにその幕を閉じました。

## 失敗の要因

なぜ志士たちは生野で挙兵したのでしょうか。

先に説明したように幕末但馬には、海外からの侵攻を防ぐために、農兵が組織されつつありました。

生野には銀山を統括するために幕府の出先機関である代官所が設けられていましたが、代官所を占拠することは、幕府の権威を失墜させ倒幕への氣勢を上げるのに格好であり、加えて代官所自体の武力も皆無でありました。また、銀山の資金力・政治力についても重く考えていました。

しかし、農兵組織は8月に取り立ての指示が出されたばかりで、訓練は一度も行われておらず実体は準備中であり、農兵も村役人の命するままに集まってきたものでありました。

一方、代官所では川上猪太郎代官は出張中のため不在であったものの、元締め武井正三郎は、表向きは志士たちに対して代官所を明け渡しましたが、事前に拳兵の情報をつかみ、占拠の寸前に周辺の各藩に援軍の密使を送るなどの機敏な行動をとりました。

そのようななか、志士たちの間でも、天誅組の壊滅後に、慎重派の平野國臣らと、脱藩をし背水の陣でのぞんだ南八郎ら強硬派との間で、解散するか決行す

るかの議論が行われるなど一枚岩ではありませんでした。

また、事前に内約があった長州藩士、鳥取藩士などの応援も得られませんでした。

## 維新への魁(さきがけ)

生野義拳は、結果的には失敗に終わりましたが、次のような点を知らしめました。

それは、武力を持たない代官所の意外な弱点が明らかになる一方で、鎮圧する諸藩の力と幕府体制はまだまだ強固である事と、討幕運動は、各地で散発的に起こしても駄目であり、藩総力を挙げて組織的に挑まねば成功しないという事でした。

天誅組の変、生野義拳はこれら戦略の変更点でした。その後、薩長同盟の成立を経て明治維新を迎えることとなりました。

このようなことから、「生野義拳」は、維新の魁と言われています。



志士たちが自刃した山伏岩(山口護国神社内)

## 北垣晋太郎と進藤俊三郎

生野義挙の数少ない生き残りのなかで、但馬出身者として、明治に入り活躍した人物がいます。

農兵組立の中心人物として、生野義挙にかかわった、養父郡能座村(現養父市能座)の北垣晋太郎(北垣国道)は、義挙が破陣した後は各地で潜伏します。

その後は、鳥取藩に仕官し、柴捨蔵や八木竜蔵と名乗り、戊辰戦争に際しては、山陰道鎮撫使西園寺公望の随員、北越戦争に参加するなど倒幕運動に身を投じました。

明治になってからは、高知県令、徳島県令、京都府知事、北海道長官などの要職を歴任し、京都府知事時代には琵琶湖疏水を完成させるなど我が国の発展に尽力しました。

朝来郡佐中村(現朝来市佐中)の進藤俊三郎は、武器周旋方として生野義挙に参加しました。京都で武器を調達し搬送の途中で生野破陣を知り、因州(鳥取)へ逃れました。その後名前を「原六郎」と変え、生家をはじめ、江戸や京など各地に潜伏し続けます。明治4年(1871)、海外留学を果し、2年間という短期留学には満足せず、公費が打ち切られて



琵琶湖疏水のほとりに立つ北垣国道の像  
(写真協力・養父市)



原六郎が頭取を務めた旧横浜正金銀行本店  
現在は神奈川県立歴史博物館となっています  
(写真協力・神奈川県立歴史博物館)



### 進藤俊三郎生家(佐中)

進藤家は代々続く豪農で、生家は「佐中の千年家」として残されています。

からも自費で経済学を学び、帰国後は第百国立銀行創設を始めとして、横浜正金銀行頭取に就任して同銀行の改革などを進めます。

また、東武鉄道、山陽鉄道、播但鉄道などの多くの鉄道会社の設立。さらには帝国ホテルの開業にも関わるなど、我が国の金融・産業界の中核的存在として活躍しました。

### 青谿書院(養父市八鹿町宿南)

儒学者池田草庵が開いた漢学塾。幕末から明治の初めにかけて全国から673人が入門し、日本の近代化を担った多くの人材を輩出しました。生野義挙の中心的人物北垣晋太郎、進藤俊三郎も薫陶を受けました。

## 維新の魁 生野義挙150年記念特別講座

9月7日、生野マインホールで「維新の魁、生野義挙150年記念特別講座」が行われ、会場には定員を大きく上回る1000人近い皆さんが集まりました。この講座は全3回の予定で、第一回目となるこの日は「生野の変をどうとらえるか、新史料の紹介もかねて」をテーマに、神戸大学大学院人文科学研究科の前田結城さんを講師に開かれました。

前田さんは、生野義挙(生野の変)を時系列で紹介したうえで「義挙とは浪士を中心とした挙兵組が、尊王攘夷を実現するため、農兵の組織化を強引に実現しようとして起こしたものである」とし、「取り立てられた農民層は生業を維持することが大事であり義挙の意識はなかった。加えて、挙兵した当人たちにもとまどいがあつた」と解説。

「生野の変は、幕藩権力と挙兵組とにおける、農兵の動員の主権をめぐる争いであつた」と説明しました。



### 第2回「志士たちの横顔」

- ◎日時 10月5日(土) 午後1時30分〜3時
- ◎会場 あさひ・ささゆりホール
- ◎講師 石原由美子さん  
(豊岡市出土文化財管理センター)

※第3回目は未定です。

決まり次第広報・ホームページなどでお知らせします。

問・生野書院 ☎679-4336

## 「人々と町に大きな影響を与えた生野義挙」

杉浦健夫さん(生野2区)



生野義挙を経済的な観点からみると、江戸時代から「生野銀山を制する者は天下を制す」と言われていたように、軍資金獲得が目的ではなかったかと考えられます。

ちょうど生野代官所の川上代官は出張中で不在でしたが、残った役人の気転で資金などを隠し、浪士たちは十分な資金を得ることができずに、集まった農兵を養えず破陣にいたったのが真相ではないでしょうか。

その後、代官の支配がしばらく続き、慶応4年(1868)には、長州軍、薩摩軍があいついで進駐し、明治に入ると政府の管理下におかれ、銀山も鉾山師の支配から官営鉾山になるなど、体制が大きく変わっていきます。

明治4年(1871)10月には、生野鉾山で焼き討ち事件が発生し、多くの人々が生野を去ります。焼け野原となった土地に新しい施設を建設する労働者として、発展する鉾山に職を求め、全国から人々が集まってきました。このことが生野の文化を形成する源になったといえるでしょう。

生野義挙からの大きな動きは、生野の町と人々に大きな影響を与えたのではないのでしょうか。

## 「生野義挙の志を後世に」

濱定夫さん(高田区)

高田の国道9号線沿いの生家の近くに、中島太郎兵衛、黒田與市郎兄弟の顕彰碑があります。

この顕彰碑は、昭和15年、当時の大蔵村総出で建立が行われ、完成を記念して盛大な式が行われました。

建立や式など、手伝いとして参加していた当時、私はまだ十代半ばであったためか、顕彰碑に込められた意味などはよく分かりませんでした。

日本は、それから戦争を経験し高度成長期を経て現在があるわけですが、そのような時代を過ぎてきたなかで、この地に使命を持って国のために兄弟で命をかけた人たちがいたことを忘れずに、我々も社会のために尽くさねばと感じます。

高田区では、生野義挙の日を前にした毎年の秋祭りの際に、おまつりをさせていただき、顕彰碑を守ってきていますが、これからも絶えることなくふるさとの誇りとして受け継いでいってほしいですね。

